イベント報告

里山でアウトドア選手の交流

村越 真

有度山トレイル三昧　2012 年 1 月 28-29 日 静岡県静岡市

市街地から里山に雄大に広がる眺望を眺めながらのレースが本ロゲイニングの魅力だ。池・永本組

村越のホームグランド有度山

今年で 4 回目を迎えた有度山トレイル三昧は、1 月 28-29 日の二日間で開催されるマルチスポーツイベントだ。土曜日はトレイルランニング、日曜日はロゲイニング。もともと村越がトレーニングの中で走っていた有度山(日本平)の里山としての環境に魅せられ、それを多くの人と共有したい、小さな垣根を作りがちな日本のアウトドア界に相互交流の場を作りたいという思いからスタートしたものだ。

有度山トレラン参加の柳下、望月選手はチームを組んで翌日のロゲイニングに臨んだ。「ずるい!」との声が・・・

アウトドア選手同志の交流

トレイルランニングは、9km のミニレースだが、整備されたハイキング道からアップダウンが小刻みに繰り返されるトレイル、川沿いのダートの農道、果ては深さ 3m 幅 1m の谷底をいく冒険チックなトレイルまで多様な走路が楽しめる。本格的なレースの少ない 1 月開催のため、エントリー開始から 2 週間で 150 名の定員を超えてしまうプチ人気イベントに成長した。今年も地元静岡在住の相馬剛、宮原徹、望月将悟、後藤豊、そしてトップオリエンティアでもある柳下大が参加する熱戦となった。また女子では、ハセツネ選手権者の大石由美子とナショナルチームの皆川美紀子がレースに華を添えた。

結果は初出場の宮原が 38 分の好タイムで優勝。後藤、望月、相馬がそれに続いた。女子は大石がハセツネチャンピオンの貫禄で優勝したが、皆川も途中の山道では先行するなど積極的なレース運びを見せ、50 秒差での 2 位となった。一般的なトレランレースは距離が長いので、普段そのような距離に向けて練習をしていないオリエンティアがトップランナーに互角の戦いを挑むのは難しい。その点、約 40 分のレースなら、十分戦える。オリエンテーリングのトップランナーのチャレンジの場として、今後も積極的にトップ選手を招待していく予定だ。

元々トレイルランナーがナヴィゲーションスポーツを始めるきっかけづくりを期待したこのイベントだが、当初、ランナーはトレランだけ、ロゲイナーはロゲイニングだけ出場する人がほとんどだった。4 回目にあたる今年は、180 名のトレラン参加者中 37 名がロゲイニングにもエントリーした。昨年はじめてロゲイニングに出場したあるトレイルランナーの方は交流会の時、「ロゲイニングって正直もっと面倒くさいものだと思ってましたけれど、これまでのレースの中で一番おもしろかったですよ」と語ってくれた。今年のトレランは足の不調でエントリーしなかったものの、ロゲイニングには仲間を誘って出場してくれた。新しいスポーツへの参加を促進するためには時間が必要なのだろう。

トレイルランニング出身で、昨年ロゲイニングにはまった地元の白鳥さん（左）。「今までで一番おもしろいレース」と本大会を高く評価してくれた。

多様な参加者

今年のロゲイニングは「清水への愛Ⅱ」をテーマに、有度山東部から三保半島にかけての東西約 10km、南北約 7km のエリアを舞台に行われた。昭和 40 年代には日本観光地 100 選の第一位に選ばれた清水は、富士山の絶景では日本一のロケーションを占める。徳富蘇峰がその美しさを顕彰した碑や、世界遺産推薦リストにも載った三保からの富士山、羽衣伝説にちなんだ天女の銅像など、清水らしさを満載したチェックポイントを、参加者は堪能した。男子トップの柳下大は相棒をトレラン界のトップランナーであり地元住民である望月将悟さんを選び、他の参加者から「ずるい・・・」と抗議の声も。5 時間で回った距離は優に 50km を超える。その一方で赤ちゃんを背負った家族や最後には脚がつって仲間に支えられたゴールする参加者など、多様な人が同じ舞台で競い合えることがロゲイニングの魅力であり、ナヴィゲーションスポーツを多くの人に親しんでもらう近道だと感じた。

ゴール後は、それぞれのクラスでトップを占めた柳下・望月組、渡辺・大沢組(混合)、皆川・井出組(女子)などにルートと戦略の解説をしてもらったが、多くの参加者が熱心に聞いていた様子が印象的であった。

ゴール後はフィニッシュ幕前で記念撮影をするチームが続出。イベントとしての演出の重要性を感じた

地元静岡のエース「チームみかエース」(三ヶ日産みかんのブランド名)の和久田・田濃。田濃選手は前回みろくでは 6km 近い帰路を和久田選手に牽引されたが、今回はその雪辱を期した

（村越 真）